

主 題：忠実であれ

聖書箇所：コリント人への手紙第一 4章1-5節

コリント教会には分裂や争いが存在していました。悲しいことに彼らは救われていない人たちのように、例えばユダヤ人、異邦人といった民族的な反目、知識人と自負する人々による偏見だけでなく、多くの人々が自分本位の物の見方や考え方、また判断に支配されていました。例えば私が感銘を受けたのでこの教師が好きだとか、私はその教師よりもこちらの教師が指導者としてふさわしいと思うので仰いでいるとか、私はあの教師がこのようなことをしたから嫌いだ、好きだといった具合に。コリント教会を建て上げ、成長させるために神によって送られ、用いられた教師たちを人々は自分勝手に評価して、私はパウロ派であるとか、アポロ派であるとか、ケパ派であるといった具合に、それぞれに指導者として仰ぎ、彼らを誇っていたのです。彼らの間違いはパウロたちを特別視したことと、彼らへの誤った判断です。また、人間的な評価でパウロたちを見たのです。こういったことが私たちの間でなされるならば、間違いなくそこにはこの教会が経験したような分裂や争いが生じるのは言うまでもありません。

そこでパウロはそういった教会の問題を知った上で、彼らを矯正するために、彼らを正しく導くために自分たちのことを正しく理解するようにと、さまざまな教えをなしてきました。3:5-9には私たちはあなたがたが信仰に入るためのしもべなのだと言いました。私たちはその働きに用いられた者にすぎないと。3:22でも私たちは「あなたがたのもの」なのだと言っています。神が私たちをあなたたちのところに送って、あなたたちがしっかりとキリストの土台の上に根ざし、成長するために用いられたのだと。こうしてパウロは自分たちのことをどのようにとらえるべきなのかを教え続けてきたのです。

#### A. 「自分たちのアイデンティティ」 1節

4:1を見ると、「こういうわけで、私たちを、」と始まり、最後に「考えなさい。」となっています。私たちのことをこんなふうに考えなさいとパウロは言います。「考えなさい」というのは「こういうふうに思いなさい」、「こういうふうにみなしなさい」、「こういうふうに判断しなさい」ということです。パウロは4章の初めからもう一度彼らに対して我々のことをどう見るべきなのか、どういう見方が正しいのか、どういう扱い方が正しいのかを教えようとするのです。

きょう我々はそのことを見ていくのですが、まず1節「こういうわけで、私たちを、」とある「私たち」というのは、それぞれの分派のリーダーとして人々が担っていたパウロやアポロやケパたちの名前を挙げています。1節でパウロはまず自分たちのアイデンティティを明らかにします。一体我々は何者なのかを明らかにするのです。

##### 1. 「キリストのしもべ」

パウロは、最初に「こういうわけで、私たちを、キリストのしもべ、」と、私たちは「キリストのしもべ」だと自分たちのことを説明します。確かに「しもべ」ということばは3:5でも出てきました。「アポロとは何でしょう。パウロとは何でしょう。あなたがたが信仰にはいるために用いられたしもべであって、」とあります。この3:5の「しもべ」というのは、「仕え人」、「奉仕をする人」、「執事」——つまり食卓の給仕をするということで「執事」と呼ばれるのですが——、そういう意味を持ったことばが使われていました。働いて仕える奉仕者の話です。

ところがきょう我々が見ていく4:1の「キリストのしもべ」の「しもべ」というのは、3:5とは違った意味のことばが使われています。この「しもべ」は「下」と「漕ぐ」ということばの複合語で、「下の漕ぎ手」という意味があることばです。これはガレー船の漕ぎ手の話を指しています。ウィリアム・パークレーという先生は「ここでパウロが仕える者という意味で使っていることばはおもしろい。それはもと、三段オールのカレー船の下段の漕ぎ手、つまり大きなオールを引っ張って海上に船を走らせる奴隷を意味することばだった。」と教えます。

ではこのガレー船とは一体何かというと、恐らく多くの皆さんになじみがないと思います。そこできょうのレジメの裏面にその絵を載せておきました。この船は紀元前から大体紀元後18世紀ぐらいまで地中海を中心としてヨーロッパで軍用船として用いられました。初期のカレー船はほとんど漕ぎ手が一段でした。そしてその次、大体紀元前500年ぐらいから上下二段に漕ぎ手のいる二段櫂船が誕生してきた。今、皆さんが見てくださっている絵は紀元前4世紀ごろから発生してきた三段櫂船と言われるもので、オールが三段になっています。オールの長さは最上段のものは約4.27メートル、中段は3.5メートル、一番下は2.28メートルとされています。船の長さは約40メートル、幅は5~7メートル。オールの数は一番上が約31本、中段と下段は27本ずつでした。

パウロが言っているこの「しもべ」ということばは、オールを漕ぐ奴隷たちの中でも一番下の最も位の

低い奴隷たちのことです。だからパウロは、私たちの中には特別な待遇もないし位も存在しない、私たちはみんなこの働きのために用いられる奴隷にすぎないのだと言っているのです。みんな同じように扱われていて、互いを比べ合ったりすることもない。このことばの背景にはそういう思いがあるのです。人々はパウロを普通の人以上の存在として非常に高めていたのです。特別な存在として見ていたのです。それでパウロは、私もあなたたちも同じガレー船の一番低いところにいる奴隷にすぎないのだから特別視するのをやめるように言うのです。キャンベル・モルガンという先生もこの「しもべ」ということばについてこんな説明をしています。「字義どおりの意味では、この「しもべ」とは、指令のもとに行動し、何も質問しない者、指定されたことを何のためらいもなく行う者、自分の上司にだけ報告する者である。」と言っています。つまりこれは上から命令されたことをそのまま文句を言わずに行う者たちで、まさにここにいた奴隷たちもそうでした。反論する権利はなく、言われたことを行うしかなかったのです。パウロはこういうことばを使うことによって、コリントの人々と自分が神の前に全く平等であるということ、私たちはキリストの奴隷なのだということを明らかにしたのです。

そして、それぞれには主人から大きな責任が与えられているということもパウロは認識していました。

「私が福音を宣べ伝えても、それは私の誇りにはなりません。そのことは、私がどうしても、しなければならないことだからです。もし福音を宣べ伝えなかったら、私はわざわざ会いに来ます。」、Iコリント9：16です。少なくともパウロはこれが自分に与えられた責任であると認識して、1節の後半に「**神の奥義の管理者**」と自分を呼んでいます。ですからパウロは自分に与えられた責任、主人である方が私に何をせよと命じてくださっているのかはっきりわかっていたのです。そしてその働きを忠実にやったのがこのパウロであり、そのほかの働き人たちだったのです。ですから、この「しもべ」ということばをあえて使うことによって、コリントの人たちと自分たちの間には何の差もない、私たちは平等なのだを教えているのです。もちろん私たちはパウロがどれほどすばらしい信仰者であったかを知っています。彼を高く持ち上げたいという人間的な気持ちは理解できます。しかし、パウロは主の前に非常に正しい人物であって、決して自分がそのような特別な扱いを受けること、特別な目で見られることをよしとはしませんでした。当然人々が彼に尊敬を払うのは、彼がこの働きを忠実にしていたからです。でもパウロは、私もあなたたちも神の恵みによって救われた者たちにすぎないと言いたかったのです。非常に謙虚だったのです。すばらしい信仰者であったということがこの彼の証を通して見ることができます。

## 2. 「神の奥義の管理者」

彼は二つ目に「**神の奥義の管理者**」であると考えなさいと言うのです。「**神の奥義**」というのは、神様によって啓示され、私たちに語るように託された福音のメッセージ、救いのメッセージだと私たちは既に学びました。この救いのメッセージも神が私たちに明らかにしてくださなければ我々は知ることはなかったのです。啓示というのはそういうことです。我々が一生懸命知恵を働かせたらどり着くものではないのです。どんなに知恵を働かせても私たちは決して神の真理に到達することはない。神が明らかにしようとしてくださったから私たちはそれがわかったのです。パウロは啓示によって示された神様の救いのメッセージを託された者だと言うのです。

### 1) 「管理者」

この「**管理者**」ということばですが、ことばの説明に時間を要しているのは非常に重要なことばだからです。この「**管理者**」というの「家」ということばとそれを「**管理する**」という二つのことばの複合語です。そこで「**執事**」や「**管理者**」、「**支配人**」という意味を持っているのです。この「**管理者**」というのは何かに対して権利や責任を持っている人です。パークレーがこのことばにも非常に重要な説明をしてくれているので、そこをお読みします。「**執事は家もしくは財産の管理全般をつかさどり、使用人を監督し、物資の支給、分配を行い、一家全体を切り回していた。しかし、使用人たちを監督していたとはいえ、その家の主人から見れば執事もまた奴隷にすぎなかった。同様に、ある人の教会における地位が何であれ、教会でどれほどの力を振るおうと、どんな特権を享受していようと、彼もキリストのしもべにすぎないのである。**」と。つまり、主人に代わって家を監督するために執事という責任を与えられた人がいます。この人は今見たようにその家で雇われている者たちを監督したり、物資の支給や分配をしたり、家で主人ができないことを彼に代わってするのは、ですから、執事に任命された人は、確かにそこにいる奴隷たちにいろいろな命令を出す役割を持っている。でも主人から見たら、執事もそれ以外の奴隷もみんな奴隷に代わりはないと言っているのです。こういうことばをあえて使うことによって、パウロが言いたいのは、あなたたちと私たちは全く同じであって、そこに何のクラスも、位も存在していないということです。私は一番低いクラスの奴隷であり、確かにあなたたちとは違う役割をいただいているけれども、私もあなたたちと同じ奴隷なのだ。だから人間的な何かを誇るような、また褒められるようなことがないという話です。

パウロは、コリントの人たちに自分はこの「**神の奥義の管理者**」であると考えようにと、私たちのこ

とをそのように思いなさいと命じたのです。福音を語るという大切な責任を神様は下さった。そして私たちはこのコリントの町にやって来て、キリストの福音を宣べ伝えたと。確かにそのような働きをしたけれども、私自身もコリントのあなたたちもみんな同じキリストの奴隷で同じ身分、ただ異なる責任があるのだと伝えたのです。

しかし、パウロたちだけが「管理者」だったのかということそうではない。すべてのクリスチャンたちに対してもそのようにみことばは教えています。Iペテロ4:10には「それぞれが賜物を受けているのですから、神のさまざまな恵みの良い管理者として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい。」とあります。パウロはここで確かに自分たちには特別な務めが与えられた。でも、それを言えば信仰者はみんな同じだと言うのです。救いにあずかっているあなたにも特別な務めが与えられていると言うのです。それが証拠に、Iペテロ4:10に「神のさまざまな恵みの良い管理者として」とあります。ここで使われている「管理者」ということばと今私たちが見ているIコリント4:1の「管理者」は同じことばです。

この「さまざまな恵みの……管理者」の「さまざま」というのはいろいろな色の話です。例えば絵を描く時にパレットの上に絵の具をいっぱい出します。それをいろいろと混ぜていくと、さまざまな色が出てきます。その混ぜ方によって、その分量によって色がいろいろと変化します。つまり言いたいことは、皆さんはひとりずつ特別な色を持っているということです。例えばある人は仕えるという賜物や教えるという賜物があるかもしれない。確かにその点では共通していても、それぞれに与えられている分量が全部違うのです。つまりこうしてみことばが私たちに教えてくれているのは、あなたは神様から特別な責任をいただいていると。なぜならあなたは特別な存在として神様がお造りになったので、あなただけの色があるのです。それは隣の人とは全く違うのです。世界にひとりしかいない。それが何を意味するかというと、主のみこころがなされていくためにあなたは必要だということです。だから私なんか何もなくても大丈夫だ、そういう悪のささやきに耳を貸してはいけません。なぜ神様があなたを特別な色に染められたかということ、あなたがみんなの成長のために必要だからです。ですから私は何もできないという嘘にだまされてはいけません。それだったら神はあなたを救う必要はなかったのです。神様はあなたを救ってくださり、あなたに特別な賜物を下さったのは、あなたが全員の、全体の成長のために必要だったからです。みことばは私たちにそう教えます。だから私たちはみんな働き人なのです。それぞれの賜物を生かして働きをなしていくのです。自分はいてもいなくてもどちらでもよい存在であると、自分なんか必要ではないのだと、もしそのようなことばを皆さんが耳にするなら、それは嘘です。聖書の教えではない、神の教えではないのです。神様はご自身の栄光のためにあなたを使ってくださいのです。パウロも神から特別な任務をいただき、彼はその任務を果たしたのです。我々も同じです。神からの特別な任務を私たちがいただいているのです。

## B. 「自分たちの責任」 2節

### 1) 忠実

2節に「このばあい、管理者には、忠実であることが要求されます。」と続きます。こういうふうには私たちのことを見なさいと語ったパウロは、自分たちの責任について話すのです。私たちの責任とは、一言で言うなら「忠実であること」だと言います。「忠実」ということばは「信用のできる」とか、「当てになる」とか「確かな」という意味です。「管理者」である彼らに要求されていることは忠実だと明らかにされることです。実際2節のみことばを直訳すると、「忠実だと明らかにされることが管理者に要求されることです。」となります。ですからパウロは管理者である私たちにとって一番大切なことは主に対する忠実さであり、どんなことでも忠実に行く、それが私たちの務め、責任であると教えます。それが「明らかにされる」と受動態で言っているのは、ただ自分がそう思い込むだけではないのです。この後パウロは神によってそのすべての真相が明らかにされるという話に移っていきます。だから我々が私は神の前に忠実ですと、一生懸命自分で言ったとしても問題なのは本当に神がそう思っておられるかどうかです。ですから自分ではなくて、あえてここでは忠実だと明らかにされることが管理者に要求されると。

ですから神が私たちのことをどうごらんになるかが最も大切です。パウロはそのことを知っていたゆえに、自分の働きについて「私が自分の走るべき行程を走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音をあかす任務を果たし終えることができるなら、私のいのちは少しも惜しいとは思いません。」、使徒20:24ですが、彼自身は神様からどんな務めをいただいたのかを知っていたゆえに、その務めを果たすためであつたら死も歓迎すると言ったのです。彼が考えていたことは自分が何をしたいかではなくて、神が何を望んでいるかであり、これが神のみこころである以上、そのために私はすべてを尽くしてその働きを行うという覚悟を持って、彼は信仰者として歩み続けていた。今、彼は私たちに管理者には忠実であることが要求されると教えてくれました。当然彼はそれを信じて歩んでいたことがわかります。ただ何となくしたのではない、いつか自分の歩みが本当に神の前に価値があったのかどうかを正しくおさばきになる方がおられ、その時にそのことが明らかになると。このように語った彼はそれにふさわしく歩んでいたの

す。彼は主から与えていただいた務めのために、管理者として私はこの働きを下さった人にこの働きを私は忠実にやり続けていきたいと、歩み続けていきたいと願ったのです。

## 2) 働きに用いられた忠実な人々

我々はパウロが忠実だったことは知っているのです。しかし、パウロ以外にも忠実な人々はたくさんいました。パウロは幾つか名前を挙げています。神の前に忠実な人々を神は使うということが言えます。何か特別なことをしたから神がお使いになるのではない。神に喜んで従っていこうとする人々、神のみこころに忠実に歩んでいこうとする人を神は絶対に放っておかれぬ。そういう人たちをお使いになったのです。

そこで、パウロが挙げたリストを何人か見てみると、例えばテモテに対して「テモテは主にあって私の愛する、忠実な子です。」とⅠコリント4：17で言っています。本当に神に対して忠実に歩もうとしている。エペソ6：21やコロサイ4：7にテキコという人物が出てきます。どちらにも「忠実な奉仕者であるテキコが」と書いてあります。エパfrasという名前も出ています。コロサイ1：7に「彼は私たちに代わって仕えている忠実な、キリストの仕え人である」と。コロサイ4：9には「忠実な愛する兄弟オネシモ」とオネシモの名前も出ています。また婦人執事たちに対してもⅠテモテ3：11に「婦人執事も、威厳があり、悪口を言わず、自分を制し、すべてに忠実な人でなければなりません。」とあります。婦人執事がそのことを要求されるなら男性のすべてのリーダーたちにも同じことが要求されていることは言うまでもない。神様に忠実に生きていく、みことばに忠実に生きていくのです。そういう人々を神はお喜びになり、そういう人々を神は使ってくださいなのです。なぜならば、その人は確実に信仰によって成長するからです。

主のみことばに従っていく以外に信仰の成長を見る方法はありません。神様が教えてくださることに従っていこうとするのです。しかも感謝なことにそれを実践する力まで神様は備えてくださっている。そうして私たちは実践して成長するのです。ですからここに挙げた多くのキリストのしもべの名前、彼らに共通していたのはみんな神の前に忠実であったと。パウロが喜び、当然神が喜んで彼らを大いにお用いになったのは言うまでもありません。

あなたも私も最終的に神が何を問われるか、神の前に立った時に神様があなたや私に何を問われるか——それはただ一つです。あなたは私に対して忠実であったかどうかです。ですから、主人がオリブ山においてイエス様が最後にお話になった説教の中で、主人が彼に言うのです。「よくやった。良い忠実なしもべだ」(マタイ25：21)と。「よくやった。いろんな働きをしたしもべだ」とは言わなかったのです。よく頑張って、世界をあちこち回ってすばらしい働きをしたとは言われなかった。神様が言われたのは、「良い忠実なしもべだ」でした。主が言われたことに従った者たちです。ですからこういったパウロたちのように使徒であったり、今の時代で言えば牧師であったり、長老であったり、執事であったり、教師や宣教師、そういう働き人であろうとなかろうとすべての信仰者に必要なことは、主に対して忠実であることです。

## 3) 自分の忠実さの実体が明らかになる日が来る

そしてもう一つ、自分の忠実さの実体が明らかになる日が来るという事実を忘れてはいけないということです。その日は来ます。何をしたのかが問われるのではない。あなたが本当に主に対して忠実に生きたのかどうかその実体が明らかにされる日が来ます。それを我々はしっかり心に刻みながらきょうを生きなければならない。神の前に立った時にそのことが明らかにされます。イエス様がルカ12章の中で家のしもべたちを任せた管理人の話がされました。務めが与えられたのです。ところがある管理人はまだ主人が帰ってこないと思って好き勝手なことをします。でもある管理人はきょう主人が帰ってくるかもしれないと思って備えをしているのです。備えをしていた管理人は、「忠実な思慮深い管理人」(ルカ12：42)と呼ばれています。でもそうでなかった者は、「不忠実な者どもと同じめに合わせる」(ルカ12：46)と書かれています。言いたいことはわかります。主に対して忠実でなかった人たちはまた今度やればいい、またそういう機会が来ればと先延ばししているのです。そのときに主人が帰ってくるのです。その時に「彼をきびしく罰して、不忠実な者どもと同じめに合わせるに違いない」と。ですから目を覚ましていなさいということです。この地上における最後の日がいつかわからないから、あしたから忠実に生きようと思わずに、今からそうありなさいと教えます。

## C. 「自分たちへの評価」 3-5節

さて、その後3-5節を見ると、今度は自分たちへの評価、自分たちへのさばきの話が続きます。

### 1. 人間の評価

「しかし、私にとっては、あなたがたによる判定、あるいは、およそ人間による判決を受けることは、非常に小さなことです。」とあります。パウロはまず人間の評価について言います。今お読みしたところを直訳すれば「しかし、あなたたちやあるいは人間の火でさばきを受けることは私にとっては非常に小さなことです。」となります。あなたたち、あるいは人間の火でさばきを受ける、また人間の法廷でさばきを受けるとも

訳せます。まず3節で、どちらのことも自分にとっては「非常に小さなこと」だと書いてあります。「小さなこと」というのは重要ではない、取るに足らないことだということです。だからあなたたちによる判定——コリントの人々による判定や人間による判決を受けることは私にとってはどうでもいいことだ、重要ではないと言うのです。なぜならコリントの教会はパウロがすごいとか、何とか、みんながしていたのです。そんなことは私にとってはどうでもいい話だと。

続いて見ていただきたいのは、「判定」と「判決」ということばです。でもこのように訳したことばは言語の中には一つしか出てこないのです。それを読者たちが理解できるようにと、こんなふうには訳者が訳したのです。このことばも「繰り返し」と「見分ける」という二つの動詞の複合語です。そこから「調べる」とか「尋ねる」、「問いただす」、「研究する」、「法廷で審問する」とか「取り調べる」という意味があります。そういう意味があるのでここで「判定」と「判決」と訳したのです。最初の「あなたごたによる判定」、つまりあなたがたによつての取り調べです。次に出てくるのが「およそ人間による判決を受けること」、新改訳聖書の欄外に直訳すると「人の日による」と書いてあります。実際にはここには「人の日による」と書いてあるのです。ではどうしてこの「日」が判決と訳されたのかです。実はこの「日」と訳していることばには幾つかの意味があります。一つは「昼間」という意味です。日の出から日没まで、これを「日」と言うのです。ここで使われていることばが持っている意味の一つです。もう一つは「24時間」を指します。「一昼夜」という意味もあります。もう一つは「主の日」とか「主のさばき」の日の意味があります。実際に私たちは1:8でイエス・キリストの日、つまり最後のさばきの日のことを見てきました。3:13にも「その日は火とともに現われ」と書いてあります。ですから確かに「その日」はさばきの日というふうに見てきましたが、4:3の「日」は神様が最後に下されるさばきではないのです。なぜかという「人間による」ということばがついているからです。ここには人間のという形容詞をあえてつけることによって神がなされるさばきと人間がなすさばきを区別したのです。

これまでは確かに「日」と言った時に、最後に神が下すさばきと記されていた。でもここではあえて「人間の」と言うことで、神ではなくて人間がなすさばき、人間によるさばきです。だから先ほど見たように「判決」ということばを使っているし、そして新改訳2017では「人間の法廷で」と訳しています。その理由はそこにあるのです。神の法廷におけるさばきではない、「人間の法廷」におけるさばき、それがこの箇所で言いたかったことなのです。ですからパウロが言いたいことは、コリント人たちからどんな評価を受けようと、たとえ多くの信仰者たちは信仰ゆえにさばきの場についてということ。人間のさばきでした。たとえその場でどんな判決を受けようと、私たちにとっては重要なことではないと言っているのです。なぜなら人間がさばきの場につけてその人物をさばいたとしても本当のことはわからないのです。その人たちがしたことはわかります。その人たちが言ったことはわかるでしょう。でもその人たちの心がわからない。ですから人間は誰も正しく評価することはできない。だから私はみずからの働きに関しての人々からの評価に一切関心を払わないのだとパウロは言っているのです。

パウロという人物は人が自分の働きをどう評価するかは関係なかったのです。なぜなら彼らはみんな私のすべてを知っていないから。彼らが見ているのは表面的な部分でしかないから。それを見て彼らがいろいろと彼を褒めることがあったり、また彼を嫌うことがあったとしてもそれは構わないと。最終的に神様の評価というところに話を進めていくのですが、まず人からの評価は私にとって全く意味のないものだと思います。

## 2. 自分の評価 3b-4節

それで終わるのではなくて、3節の後半を見ると「事実、私は自分で自分をさばくことさえしません。」とあります。今度は自分自身の評価について言うのです。パウロがこう言ったのは、自分自身でさえ自分を正しく評価することができないことを知っていたからです。例えば、私たちは神様に仕えていると、きっと神様は喜んでくださっていると思うではないですか？何か奉仕をしていると神様、喜んでくださっていると思うのですが、問題は本当に神が喜んでくれるかどうかです。私たちはただそう思い込んでいるだけかもしれない。神様という方は、あなたが何をするかなど関心がないのです。問題はあなたがどんな心でしているかです。それをこの後パウロは教えてくれるのです。でも私たちはどちらかということ心よりも何をするかにはフォーカスが当てられています。こんなことをした、私たちは昔こんなことをした。それがどうしたのですかと……。全部神の恵みだったのです。問題は神の前を正しく忠実に生きたかどうかなのです。でも人間のフォーカスは別のところに向いているのです。目に見えることです。それがこのコリント教会の問題でもあったのです。彼らの評価は見えるところでの評価だったのです。だからパウロはそんなのはどうでもいいと。そして自分が自分に対して、例えばもしおまえ、よくやっているな、そういう思いがあったら、私はそれも受け入れないと。なぜなら自分も自分のことをわからない。確かにいろいろなことをしているけれども、そしてきつこうだろうと思ひ込むことがあっても、問題は果たして神がそうお思いになるかどうかです。

4 節に「私にはやましいことは少しもありませんが、だからといって、それで無罪とされるわけではありません。」と続きます。パウロという人物は間違いなく自分の信仰生活、自分の生活を厳しく吟味した人物です。本当に神の前に告白しなければいけない罪があるかどうか、自分の思っていること、していることが神の前に正しいのかどうか、それを非常に厳格に吟味した人物です。そして神の前に間違っていることがあるならば、正しく神の前にそれを告白して、神の前を正しく歩み続けていこうと、そのように生きた人物であることは言うまでもない。その上で彼は「私にはやましいこと」がないと言うのです。心を探ってみて正直に神の前に告白しなければいけない罪があるか——。私にはそれはないと。それは彼が正しく歩み続けていきたい、その思いを持っていたからです。

それでも「だからといって、それで無罪とされるわけではありません。」と。先ほども見てきたように、確かに私は調べたら告白しなければいけない罪はない。でも気づいていないものがあるかもしれない。神は私のすべてを見ておられるのです。私が見ているのはその一部でしかない。私は神の前にすべて告白しながら歩んで来たから、今、神の前に告白しなければいけない罪を持っていない。でもだからといって、私が神の前にすべてにおいて正しいかという、そうは言えないと。自分自身が神の前に不完全な存在だということをちゃんとパウロは知っているのです。当然私たちは人間的な思いを持って、それをしっかりと握り続けて行くことはできますよ。私は神に喜ばれていますと。でも、神が私の心のすべてをごらんになっておられるということを考えた途端、その挙げた手は下がっていきませんか？一体何を言っているのだろうと。まさにそのことをパウロはここで言うのです。ですからパウロにとって人の評価や自分自身の評価はどうでもよかったのです。人々からの評価、自分自身の評価が正しくないことを知っていたからです。

### 3. 神の評価 4c-5節

しかし同時にパウロは、神の評価だけは正しいことは知っていたのです。心の隅々まですべてのことを知っておられる主が正しく評価してくださると。もし我々が人間の評価とを重んじ始めたらどうなるかという、その評価を得るためにいろいろな妥協を繰り返していくと思いませんか？その人たちに好かれようと思ったら、その人たちが好むことをしなければいけないし、言わなければいけないのです。パウロはそんなふうには生きなかった。私たちもそんなふうには生きたくないのです。私たちは神に喜んでいただくように生きたいのです。もし私たちがみことばを語る時に、これはちょっとあの人にとって厳しいなとか、これはちょっとあの人にとって辛いだろうな、そういうところを外しましょうということになったら、私たちはもう既に神の前に妥協したことになるのです。私たちが神の真理を語って、それによってすべての人に嫌われてもそれでいいのです。人からの称賛を我々は得ようとしていないからです。私たちの責任は神様の真理に立つことであり、その真理を伝え続けていくことであって、パウロはそのことを願っていたのです。人からの評価などどうでもいい、自分が自分に対してなす評価もどうでもいい。私の考えていることはただ一つだけ、それは神様の評価、それだけを考えて生きていると。ですから、彼は人からの称賛を得たいと思っていなかったゆえに、人が聞きたいようなメッセージを語らなかった。人が聞かなければいけないメッセージを語ったのです。自分を愛してくれるような働きをしなかったのです。神を愛して、人を愛して彼は神の前を正しく歩んだのです。

#### 1) 真のさばき主 ルカ 12 : 3

パウロの関心はただ一つでした。神からの評価を考えて生きたのです。そしてそのことが4節後半から5節に出てきます。「私をさばく方は主です。」、人ではないと。主が私をさばくのだと。この「さばく」ということばは、今まで見てきた3節の「判定」とか「判決」と同じことばが使われています。人間の法廷に立っている話だと見てきました。今度は神の法廷に立つのです。人間の法廷でいろいろなさばきを受けてもどうでもいい。でも神の法廷に立った時になされるさばきは完璧なさばきです。誰ひとりとして反論できないのです。誰ひとりとして神様は私の本当の心をおわかっていないと言えないのです。わかっておられるから。その日が来るのです。ルカはこう言います。「ですから、あなたがたが暗やみで言ったことが、明るみで聞かれ、家の中でささやいたことが、屋上で言い広められます。」と、ルカ 12 : 3 です。隠れたことが明らかにされるといことです。隠れた所でなされたこと、隠れたところで語ったこともすべてが明らかにされる日が来るということ。そこでパウロはコリント教会に命令するのです。「ですから、あなたがたは、主が来られるまでは、何についても、先走ったさばきをしてはいけません。」、この「さばき」をするというのは「非難する」とか「咎める」という意味です。コリント教会は人々の外側だけを見て、彼らを非難していたのです。それが一つの原因で教会の中に分裂があったのです。私たちは教会に誰かを非難するために集まっているのではないのです。もし兄弟が罪を犯したなら、愛するゆえにその人のところへ行って、その兄弟に罪を犯している、悔い改めなさいと勧めるのです。そのことを言いふらして噂を広めることではないのです。それは罪です。私たちは分裂を作るのではなく一致を作るのです。

#### 2) 真のさばき

パウロはこうしてこのコリント教会にあった大きな問題を指摘して、彼らを正しく導こうとするのです。「先走ったさばきをしてはいけ」ない、あなたたちがあたかも審判者であるような思いを持って行動してはいけません。審判者は神なのだというのです。だから神様がなされる完全なさばきが下される前に自分たちの勝手なさばきを下すようなことがあってはいけません、そのように命じたのです。なぜパウロがそう言ったか——。既に見てきたように、あくまで人間というのはその人の外側、その人のしていること、その人のことばを見て判断するのですが、誰ひとりとしてその人たちの心を見ることができないからです。でも主は違う。「主は、やみの中に隠れた事も明るみに出し、心の中のはかりごと明らかにされます。」、「やみの中に隠れた事」、私たちが見たり、知ったりすることのできないその人の隠れた部分です。我々が見えない部分です。神様はそこを「明るみに出し」とあります。これはそこに光を当てるという意味です。心の「はかりごと」というのはその人の心にあるさまざま目的とか計画、意図することや動機のことです。それを「明るみに出」される。それを公に見せる、あらわにするということです。

私たちが見ることのできない部分を神が明らかにしてくださる。なぜなら神はそこを見ておられるからです。確かにこの「やみの中に隠れた事も明るみに出し、心の中のはかりごと明らかにされます」と言った時に、その人のうちに潜んでいる罪を神は明らかにされてさばかれるのではないかと思う人もいるでしょうが、どうもそのさばきという話ではない。なぜかという、その後を見ると、「そのとき、神から各人に対する称賛が届く」と書いてあります。神様が褒めてくださるという話です。罪が明らかにされて褒められるということはないでしょう？なぜならこの箇所が言っているのは、主は各人、クリスチャンたちに称賛を与えるというのです。あなたに称賛をくれるのです。主はあなたを褒めてくれると言うのです。確かに私たちがキリストのさばきの座についてすべてのことが明らかにされます。その上で私たちは信仰者として歩んで来たその働きに応じて神様からの褒美をいただくのです。いただいた褒美を用いて私たちは永遠に神をほめたたえていくのです。ただ驚くべき真理がここに書かれてある。それは、神様はあなたを褒めてくれると言うのです。

私たちの信仰生活はどちらかというと、不信仰と怠慢、偶像礼拝の連続だと思えます。神以外のものを愛してしまうこと、頻りにありますよね。既に私たちがイエス様という土台の上に自分たちが家を建てたのだ、つまり価値ある生活をするかと言われた時に神様、私はそんな生活をしていないと思われた方もおられるでしょう。毎日の生活を振り返った時に、神様、私って本当にあなたに喜んでいただけるのかどうか、神が私を喜んでくださっているのかどうか、そういうことを考えた時に私はそうではないと思うかもしれない。でもみことばが私たちに言うのは、あなたが神の御前に立った時に、そのようなあなたでも神はあなたを褒めてくれると言うのです。なぜかという、神はあなたの心を見ているからです。あなたは神を愛するから喜んで犠牲的にしたことがあるでしょう。誰も見ていなかったかもしれない。でも神は見ておられた、それを喜んでくださっているのです。主を愛するゆえに誰かにイエス様のことを伝えたい、このすばらしい救いを伝えたいと思って、語ろうと思ったけど、実際は話さなかった。そういった経験もあるでしょう。語りたかったのに語れなかった。後悔したかもしれない。でも少なくともあなたはその時にその人の救いのことを祈っていた。いいです？神はそのことをご存じなのです。誰にも感謝されなかったし、誰の目にもとまらなかったあなたの奉仕も神の目には止まっていたのです。

感謝だと思いませんか？そんなことも神はちゃんとご覧になってくださっているのです。こんな不完全などしようもない信仰者の心のすべてのことを神は見てください。あなたや私が神を愛していることを神は見てくださっているのです。それを喜んでくださっている。神様、私なんか不完全です、神はそのことをご存じです。でも神を愛するゆえにみことばに従おうとしてきたこと、神を愛し、神に感謝するゆえに、神を心から礼拝したいと思って歩んだことも、すべてのことを神は見てください。だから、その時には神からの称賛があなたに届くのです。なんと神様だと思いませんか？私たちの神はこんな神なのです。称賛に値しない私たちに神様はお褒めのことばを下さる。正しい心で私がいつもあなたの前を歩み続けていくことができるように、私の心を守ってください。正しい動機ですべてのことができるように、私を助けてください。あなたを愛する愛において成長し、より忠実にあなたのみことばに従えるように私を助けてください。こう祈ることは間違っていますか？私たちはこう祈ってはいけなんでしょうか？神はお喜びになる。なぜならできないことを自分の力ですることぐらい愚かなことはないでしょう？備えられた神様の助けをいただきながら生きることができるのです。神様、あなたに喜ばれることをしていきたい、あなたのために生きていきたい、どうかその思いをあなたが強めてくださるように、どうしようもない私だけれども、あなたが助けてくださるように、何とかあなたの役に立って、あなたのすばらしさを人々に証する者として用いていただきたい、助けてくださいと。私たちはそうやって神の前に助けを求めることができるのです。そして神はそれを喜んでくださるので

すごい恵みで私たちは救われました。一方的な神の恵みです。そして救われた後も失敗だらけの私たちを神は助けて下さる。こんな神様によって私たちは生かされ、守られ、導かれているのです。そしてこんな神から我々みんな称賛をいただくのです。だから互いにさばき合うことはやめなさい、争い合うことはやめなさいと。我々はみんな神の前に平等でみんな神のしもべなのだ、皆主の栄光のために生きているしもべなのだ。皆主の評価だけに目を止めて、きょうを生きるしもべなのだ。そのように生きていきなさい。そのように生きたパウロがそんなメッセージをコリントに送り、そして約2000年たった今も私たちはこのメッセージを神からいただくのです。どうかあなたのさばき主である主が下さる評価、与えてくださる評価をしっかり覚えながらこの新しい一日を、この主のためにしっかりと生きて行きましょう。